旅の空Seaド ㉜

未完のサグラダ・ファミリアに感動

バルセロナは観光都市の手本

伊良波　朝義
義空間設計工房代表取締役
1級建築士
古都首里のまちづくり期成会常任理事

いらは・ともよし
　1967年生まれ。那覇市出身。琉球大学卒業後、上京。建築家・内井昭蔵氏に師事。帰郷後、現職。NPO法人首里まちづくり研究会副理事長、社団法人沖縄県建築士会首里支部副支部長、社団法人日本建築家協会沖縄支部幹事。

オラ！（こんにちは）、昨年11月下旬に建築士仲間十数名で憧れのスペインを旅して来ました。首都マドリッドを皮切りに、古都トレドやアンダルシア地方のコルドバ、フラメンコで有名なグラナダ、スペイン第三の都市バレンシアなどの世界遺産を中心に巡り、旅の最大の目的地であるカタルーニャ地方のバルセロナへ。

　バルセロナは地中海に面した温暖な地域で、平地が少なく起伏に富み、フランスに隣接している影響もあって、芸術のまちとして親しまれています。モデルニスモ建築やピカソやミロ美術館など見所が多く、地下鉄や徒歩で十分に回れ、レストランやショップも中心部に集中しているのも魅力的です。

　モデルニスモとは「新しい芸術」を意味するスペイン語で、19世紀末から20世紀初頭にかけてカタルーニャ地方で興った芸術復興運動のことを指します。この動きが著しかったのが、豊富な資金力を持つ新興ブルジョアたちをスポンサーにした建築分野で、イスラム美術とゴシック美術を融合させた点が特徴です。

　モデルニスモ建築で有名な建築家は、バルセロナを代表するアントニ・ガウディです。彼は、カタルーニャ南部レウス郊外の銅板器具職人の家庭に育ち、16歳で建築家を目指してバルセロナに移り住みます。苦学の末に建築家となった彼は、パリ万博に展示されたショーケースのデザインをグエルに認められ、以降、数多くの傑作を世に送り出しましたが、1926年、教会へ向かう途中、路面電車に轢かれて生涯を閉じました。バルセロナには彼が手がけた建物が数多くあり、グエル公園やカサ・ミラ、カサ・バトリョ、グエル邸、カサ・ビセンスなど6件が世界遺産に登録され、多くの観光客が訪れています。

建設が続く未完の聖堂サグラダ・ファミリア

　ガウディが生涯を捧げ、今なお未完の聖堂サグラダ・ファミリアは、この旅のクライマックスに相応しく、偶然にも20日前にローマ法王ベネディクト16世によって、正式に教会と認定する聖別のミサが執り行われた直後でした。1882年に着工しましたが、聖堂内部が完成していなかったため、これまで教会として認定されていませんでした。高鳴る鼓動を抑えつつ、3つの門のうちガウディが存命中に唯一完成した誕生の門から入場することに。

　内部は、樹木のような柱が林立し、森の中にいるような空間に圧倒され、上部に近づくにつれて枝分かれし、柱が自ら成長していくような表情に感動し、また、色鮮やかなステンドグラスは、白で統一された内部に彩りを添え、刻々と変化する様は、まるで生き物のようにも見えました。

　現在も約17，000㎡の敷地内では、「ガウディが残した設計図や模型を元に建設が続けられ、完成まで数十年は掛かると言われていますが、継続しつくり続ける精神にバルセロナの文化を垣間見たような思いです。

　私が所属する「古都首里のまちづくり期成会」は、首里のまちづくりに関わる各団体や関係機関の協力のもと、歴史的建造物等の復元や整備を推進しています。

　歴史や文化の厚みが増し、魅力的なまちなみが生まれ、バルセロナのような回遊型の観光都市になれるように、日々のまちづくり活動に励む今日この頃です。

色鮮やかなステンドグラスのサグラダ・ファミリア